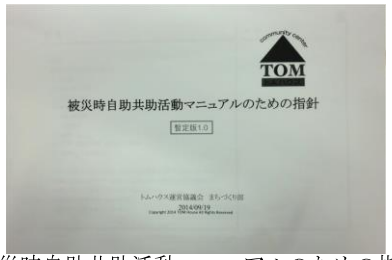
ふれあいトムともだより No3

「地域の防災を共に考える」

〈住み暮らす地域の実情に合わせて〉

東日本大震災からまもなく４年が経過し、今後も巨大な首都直下型地震の発生が危惧されています。防災対策については、これまでの国や自治体単位に加え、住んでいる地域に合わせて防災計画を定める「地区防災計画制度」が創設されました。これは災害時に「誰が、何を、どれだけ、どのようにするべきか」など、居住者自身が地域の特性に合わせた項目を自由に盛り込み、具体的に整理しながら地域の防災力を高め、地域コミュニティを活性化することを目的としています。

11月22日の第４回ふれあいトムともでは、「地区防災計画」推進のためトムハウス運営協議会まちづくり部が策定した「被災時自助共助活動マニュアルのための指針」を紹介し、住み暮らす地域の防災について意見交換を行いました。



被災時自助共助活動マニュアルのための指針

〈被災時の状況を時間軸で想定する〉

この防災計画モデルは、12月1日（平日）午後3時、震度6強の地震が多摩市域を襲ったという仮定のもと、震災発生直後から→10分後→1時間後→半日後どのような状況下にあるかなど、時間を追ってシミュレーションしています。寒い季節の日暮れ間近、家族が仕事・学校・買物等それぞれ異なる場所にいる時間に発生したとき、どのような状況となっているかを想定し、自助として何をするか、共助としてどう対応していくかが記されています。

説明後のグループディスカッションでは、「どこにどのような人が住んでいるのか、地域として把握しきれていない」「防災マニュアルの雛形として大変有益であり、多くの住民に周知される取組みを進めていくことが大事」等の意見が次々と出されました。

熱心に意見交換する参加者の皆さん

〈自分の住み暮らす地域に引き寄せて、共に考えあう〉

1月24日の第5回ふれあいトムともでは、第4回の議論をもとにグループ討議を行ない、「最低限どんな備蓄品を保管しておくのが良いのか」「住んでいる人が分からない状態で、安否確認をどう行っていくのか」「自治会等での共助が希薄になっている折、今後継続していくにはどうしたらよいのか」「公助は被害の大きいところを優先するため、1週間自助・共助で対応しなければならない」等のテーマについて意見を交わしました。また、保護者が他都市で働いている子ども達への対応をどうするのかという課題も出されました。

ふれあいトムともでは、今後も地域で作成している防災マニュアルなどを学びあい、地域のコミュニティを活かした防災・減災対策について、共に考えあいたいと思います。

＝西落合小学校「にしおちダイアリー＃18」より＝

《避難訓練》

学校では、万が一の時に備えて毎月避難訓練を行っています。（中略）児童は、避難開始の合図から校庭での点呼終了までを4分台で行うことができますが、これで充分ということはないと考えます。本校の避難訓練の指導事項の中に「お＝おさない、か＝かけない、し＝しゃべらない、も＝もどらない」がありますが、これらの徹底も含めて一層安全に避難ができるように指導を続けていきます。

地域の団体の活動紹介

ふれあい・いきいきサロン「鶴三会」

「鶴三会」は、タウンハウス鶴牧３丁目団地集会所で毎月１回、第３木曜日に開催されているサロンです。季節ごとの俳句の会や花見・暑気払い・忘年会など季節ごとのお楽しみ、また介護制度や児童文学に関する勉強会等も行っています。１月15日に行われた、今年最初の「俳句の会」を訪問させていただきました。20人弱の参加者の皆さんは一句ずつ朗読された後、作られた時の想いや状況を語り、同じサロンに参加され句の指導もしておられる三国義輝さんから「このような言い回しではどうですか」「助詞の使い方で情景が変わる」など優しく的確なアドバイスを受けていました。皆さんも「この句の気持ちはわかるな～」「一語でこんなに変わるんですね」など、話が弾んでいます。

俳句の会では、昨年秋に「第一回句集」を発行。句集のあとがきには、「(皆さんの作られた句には) 人となり、生活感、感性がにじみ出て、面白いし、楽しい」と記されています。

参加者のお一人からは「寝ているときも、電車に乗っているときも、いつも頭に句のことがある」との話も。作句の苦労を超える楽しさ・喜びに溢れた心暖かくなる楽しい会でした。

【一月の句会から】

✧ ひたすらに草飯む山羊や十二月
✧ 江の島の波間に浮かぶ雪の富士
✧ 喜怒哀楽すべてを過去に今朝の春
✧ クリスマス句集はるばるオランダへ
✧ 白内障癒え清々し初日の出
✧ 新年の悩み初めは作句から
✧ 初雪を喜ぶ我は遠くなり

高齢者のごみ出しのお手伝いで地域のふれあい　～東落合小学校～

東落合小学校では、６年生が２・３人のチームを組み、学区内の落合団地に住む高齢者世帯の朝のごみ出しを手伝活動に取り組んでいます。毎回の燃えるごみの収集日、子どもたちは登校途中に高齢者宅を訪問し、「おはようございます」とあいさつを交わしながらごみを受け取り、近くのごみ集積所に出しています。この活動は、地震などの災害時には同小が避難所になるため、「普段から地域の方の顔を知っていることが大切」ということから始められたとのことです。エレベーターのない中層住宅５階に住まわれている高齢者の方は、「本当に助かっている。みんな素直できちんとした挨拶もあり嬉しいよ」と笑顔で話されていました。また、子ども達からは「最初は大変かなと思ったけれど、通学の途中だし、人の役に立てるのであれば嬉しい」という意見がありました。子ども達の活動を支える教育連携コーディネーターの武井さんは、「週に２回子ども達が訪問することで高齢者の見守りにもなり、また子ども達も地域の方と触れ合うことでコミュニケーションの力をつけることにもつながっている。互いに見守り・見守られる関係が創り出されている」と言われます。

地域でともに住み暮らす高齢者・子ども達の顔が見える活動が進められています。

「お願いしますよ」「はい！」ごみの受けとり

編集・発行：ふれあいトムとも世話人会
問合せ：多摩市関戸 4-72　ヴィータ・コミューネ７階　多摩ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ・市民活動支援ｾﾝﾀｰ内
（社福）多摩市社会福祉協議会　地域福祉推進課　まちづくり推進係
TEL:０４２-３７３-５６１６　　担当：松井・佐藤